



# 奇跡が起こるかもしれない

【愛媛県】一井美哉子 64歳

ここは急性期病院。

夜8時、退院支援ナーースのPHSが鳴る。

「状態は良くないが、どうしても退院したいという方がおられるので、ご本人の話を聴いていただけませんか」と医師の声。

身の引き締まる思いで病棟に上がりA氏のもとへ。

その部屋は、空気清浄機が回り面会謝絶の札がかかっていた。骨髄異形成症候群で治療を受けた85歳のA氏は、検査データ上も厳しい状態で、安静を強いられていた。

A氏は初対面の私を見るや否や、「どうしても帰ってやっておきたいことがある。2〜3日でも帰れませんか?」と、祈るような眼差しで問い掛けてきた。

自分の余命を数日と覚悟したA氏の手を取り、私は躊躇なく応えた。

「帰りましょう!」

翌日、ケアマネジャー・訪問看護師・在宅医らに連絡し在宅での支援体制を相談した。

「できる・できない」ではなく「やる」という心意気で、地域の皆とA氏の祈りを引き受けた。

2日後に退院したA氏は、「リハビリをしたい、家中に手すりを付けてくれ」と希望した。やがて、A氏が立位訓練をする動画や厳粛な面持ちで書き物をしている姿が送られてきた。

さらに、選挙に行ってきた、奥さまと気になっていた田畑を車いすで見え回った、運転免許の更新をするか否か迷っているなどの報

告がケアマネジャーから入った。

週に1度通院しながら3カ月ほど経ったある朝、夜中の1時頃奥さまと話をして3時に奥さまがふと横を見ると息が止まっていた。うだと、訪問看護師から連絡を受けた。

後日、奥さまがあいさつに来られ「主人は家でやりたかったことをしながら、奇跡が起こるかもしれないと話していた。大黒柱だった主人は、家や土地、葬儀のことなどを書き遺してくれたので亡くなった後、家族は何も困ることはなかった。私も主人のように、どんな状態になっても家で見てもらいたい」と話された。あれから十余年、最期まで家で暮らすことが「あたりまえの幸せ」となる挑戦を今も続けている。